

古川柳研究会会報

一四八号

平成二十年七月

川柳評万句合明和四年輪講

平成二十年五月十日

礎講 三橋昇太郎

明四松2続き

11 中堂ハ山といふ字を書^キ給^フ

(中堂は山という字を書き給う)

ここで「中堂」は寛永寺の根本中堂のこと。正面の法華堂と常行堂の間から見ると、中堂がひととき高く聳えているので、ちょうど山という字のようだというのである。「山」はもちろん「東叡山」で寛永寺のこと。

山といへバ上野寺といへバ芝 一一五 16

12 × おとり子ハまわらぬ舌てくどかれる

(踊子は回らぬ舌で口説かれる)

酒席に侍る踊子は、酔客に回らぬ舌で口説かれるというだけの句。席上では、留守居の句とすべきかとの意見あり。

おとり子の母くどくのを聞て居る 六 10

13 日本ハ大^キな国に六をかけ

(日本は大きな国に六を掛け)

ここで「大きな国」は中国のこと。中国では六町で一里とするのに対し、日本では三六町で一里とすることを「六を掛け」と表現したもの。

六十里ならしにあるくけんとうし 九 42

14 ます花になどハハふミのよわみ也 五 9

(増す花になどは文の弱みなり)

増す花Ⅱより好きな人。前の女にも増して愛する女。

(目)

遊女から来た手紙の中に「増す花に心に移されたか」などという言葉が見えるのは、遊女に弱みがあるからだという意味。客が他の女に心に移すには、遊女の側に手落ちがあつたことが分かつているのである。

外に増花と色文しほれ書^キ 新二 22

15 × 氷川でもちらほら国府にほふ也

(氷川でもちらほら国府匂うなり)

ここで「氷川」は赤坂の氷川明神のこと。句は門前にあつた岡場所を詠んだもので、薩摩屋敷に近いところから薩摩の勤番侍もときどき遊びに行くので、名産の「国府煙草」もちらほら匂つたことだろうと。

16 ○ 百性ハ一^トかたまりにしかられる

(百姓は一塊に叱られる)

そのままの句。村中の百姓が集められて、代官あたりに叱られている状況を設定すればいいのだろう。要は、百姓は個人個人ではなく一塊として扱われるものだとい

うことが眼目の句。

百姓ハねこだのうへで死^ニたがり 三 35

17 浅草寺御たけを直^ツに御ゑん日

(浅草寺御丈をすぐに御縁日)

「御丈」は浅草寺本尊の身長のこと、一寸八分とされる。句意は、浅草寺はこの御丈一寸八分に因んで縁日を「十八日」にされたのだと。

二九の尊二九の堂にハ二九の徳 四 八 29

18 明^ケ方にはしのくつれる天の川

(明け方に橋の崩れる天の川)

七夕の夜、牽牛・織女のためにかささぎが翼を並べて天の川に橋を渡すという説話を詠んだ句。一晚限りの橋であるから明け方には崩れる筈だと。

かささぎの橋ハ一夜のかけながし 一 三 二 9

19 かきつばた開山の日に忒本へり

(かきつばた開山の日に忒本減り)

開山Ⅱその寺をはじめて開いた僧。(目)
「開山の日」は開山忌のこと。礎講は、開山忌の日にお寺の池に咲いているかきつばたを忒本盗んでいった人が

いるという「花盗人」の句とした。

席上では、開山忌に開山が作られた池からかきつばたを切ってきて仏壇にお供えしたという光景とした方がよからうということに。一対の仏花として供えるところと「式本」が生きる。

かきつばた追善の日に式本おり 寛五蓮3

20 ○ ばら／＼といてうをあびる時参り

(ばらばらと銀杏を浴びる時参り)

丑の時参りの句。鉄槌で人形を銀杏の神木に打ちつけると、その振動で上から銀杏(ぎんなん)がばらばらと落ちてくるという光景。

神木の夜露ほむらの上へ落^テ 一六七26

21 × いたゞいて来^テとりんしをさぐらせる

(戴いて来たと綸旨を探らせる)

綸旨Ⅱ①天子などの命令。②古文書の様式の一つ。勅旨を受けて蔵人から出す文書。(目)
礎講は、杉山検校の句ではないかと思うが、はつきりしないとした。

席上では、①源三位頼政が菖蒲前に、②新田義貞が勾当内侍に、などの意見が出されたが、結論出ず。

24 ▲ 御ふ勝手しちやの大戸上^アさせる 五9

(御不勝手質屋の大戸上げさせる)

御不勝手Ⅱ身分ある人の台所の不如意なる事。(川柳大辞典)

御不勝手の旗本あたりが、世間を憚って夜分に鎧櫃などを質屋に持ち込む様子。質屋はもう大戸を下ろしているのだが、大荷物なので大戸を上げさせて搬入することになる。

鍵迄もまげて遣ふハ御不勝手 六五12

25 ▲ 蔵宿のこゝとハ花のゆるしから

(蔵宿の小言は花の許しから)

小言Ⅱ①不平を言うこと。②しかって戒めることば。③他からの苦情や非難。(目)

蔵宿が借金に來た旗本などに小言を言う場面と思われるが、「花の許し」がはつきりしない。席上では、①かつて花見の金を蔵宿が融資したこと、②免許を取るほど華道に入れ上げていること、③遊芸全般に夢中になっていること、などの意見が出たが、確たる結論出ず。

26 × 月かもの哥ハわかにさへかへり

(月かもの歌は和漢に冴えかえり)

22 ▲ 舟綿で平川ゆらり／＼こぐ

(舟綿で平川ゆらりゆらり漕ぐ)

舟綿Ⅱ舟綿帽子の略。大きな綿帽子を細長くつぶして小舟のような形にしたもの。(目)

ここで「平川」は江戸城の「平河御門」のこと、また「舟綿」は奥女中を表現したものだろう。

礎講は、奥女中が平川(神田川の旧称)を舟に乗っていく様子としたが、席上では「舟綿」の縁語として「漕ぐ」を使つたもので、奥女中がゆつたりと平河御門の辺りを歩いている様子ということに。

平川へこぐ舟わたの七ッまへ 明六義3

23 ▲ くさ／＼して置^テが端午の名残也 五9

(腐らして置くが端午の名残なり)

端午の節句に軒に挿した菖蒲がそのまま軒で腐っているのは、いわば端午の節句の名残である。

席上では、風習として、挿したままで置くものだったのか、それとも主題句の家が単に放置しただけだったのか議論があった。

餅へ入^レたのを男ハ軒へさし 六17

冴え返るⅡくつきりとあざやかにみえる。澄みきる。

(目)

阿倍仲麻呂の和歌「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出てし月かも」が和漢で有名であることを、月の縁語「冴え返る」を使つて表現したところが手柄という句。

一首にて和漢へてらす三笠山 五四31

27 ○ 御ふくろにしれて娘ハふとくなり 五9

(お袋に知れて娘は太くなり)

好きな男ができて逢い引きなどしていることが母に知られてしまった娘、かえって開き直り図太い態度で遊んでいる。

28 ○ きやうこつな者だと遣^ッ手蜘蛛をすて 五9拾七16

(軽忽な者だと遣り手蜘蛛を捨て)

軽忽Ⅱあわただしいさま。けたたましく騒ぎ立てるさま。(江)

部屋に蜘蛛が出てきたので、遊女が「きやあつ」と大騒ぎしているのを見た遣り手が、「なんだね、蜘蛛如きで大騒ぎして、軽忽な人だねえ」などとたしなめながらつまんで捨てる。蜘蛛もゲジゲジも鬼の遣り手の敵では

ない。

げぢくをつかんで遣り手老歩とり 桜 11

29 ○ むす人にむだ道させる小夜きぬた

(盗人に無駄道させる小夜砧)

小夜砧Ⅱ夜に入って打つ砧。(川柳大辞典)
夜更けに打つ砧は遠くまでよく聞こえる。まだ人が起きてることがわかるから、泥棒にやっ来て来ても目的を果たさないで諦めるしかない。風雅な「小夜砧」と「盗人」の取り合わせが可笑しい。

30 ○ 拝からよせとハ母のこわいけん

(拝むからよせとは母の強意見)

強意見Ⅱきびしく訓戒すること。嚴重ないさめ。(日)
どら息子に対する母の強意見。親父の強意見なら「この野郎、勘当だ、出て行け」ぐらいは言われるところだが、母親の強意見は「拝むから止しておくれ」が精一杯なのである。

母親の或いはおどし手をあはせ 初 38

31 ▲ 佐久間町とび口の入すゝみ台

(佐久間町鳶口の要る涼み台)

柳はしどらやたいこをつんで出し 二二 30 乙

34 ▲ 是切りの菖蒲下_レ行はなれ藏 五 9

(是切りの菖蒲下_レ行く離れ藏)

離れ藏Ⅱ住居と別棟の藏。(日)
端午の節句に、まず母屋の軒に菖蒲を葺き、最後の一束を提げて離れ藏へ葺きに行く。
隣へも階子の礼にあやめ葺 初 12

35 × ぼう付_キの中をぎし_く一_ト芝居

(棒付きの中をぎしぎし一芝居)

棒突きⅡ社寺や辻番所の番人、また坑夫などの監視役をいった。(日)

ぎしぎしⅡ①堅い物がきしんで、こすれあう音を表す語。②嚴重に、容赦なくものを言う様を表す語。③すきまのないほどつまっていくさまを表す語。(日)

礎講は宮芝居の句とし、棒を持った番人のいる境内で、「ぎしぎし」すなわち忠臣蔵を演じている様子とした。

席上では、①棒突きは関所の番人とし、関所で旅芸人が芸人である証拠に一芝居している様子(「ぎしぎし」は緊張している様)との意見、②同じく関所ではあるが、安宅の関で弁慶が一芝居打っている様子との意見、③前

佐久間町Ⅱ筋違御門の外、やや東によったあたりから、神田川沿いに神田佐久間町一丁目から四丁目まである。この河岸には材木屋が多くあったため、神田材木町の俗称もあった。(江戸文学地名辞典)

佐久間町の材木屋が、神田川に浮かべてある材木筏を鳶口で岸に引き寄せて涼み台に使う様子。

32 御隠居ハつえのあたまへ手をかさね 五 9

(御隠居は杖の頭へ手を重ね)

御隠居が杖を突いて歩いている途中で立ち止まり、杖の頭に両手を重ねて立っている様子。日常よく見る光景を観察した写生句。

にこやかな隠居杖迄布袋竹 六七 14

33 柳はしなめ過_キたのか言人つき

(柳橋なめ過ぎたのが老人付き)

なめすぎるⅡ余りにも無礼である。あまく見すぎる。ばかにしすぎる。(江)

ここで「なめ過ぎた」人物は太鼓持ちだろう。猪牙で吉原に行く客に柳橋から太鼓持ちが付いていくのである。席上では、遊び慣れた男が初心な男に付いていく様子との意見あり。

36 × おやゆびを折てこもそう貰ふなり

(親指を折って菰僧貰うなり)

菰僧が、親指を折って片手拜みをしながらお布施を貰う様子を観察した写生句。

席上では、親指を折るのは武士のたしなみを表しており、敵討ちの菰僧を表現した句との意見あり。

こも僧はもらいでもの姿なり 五 13

37 ○ 雨やとりきせるを出てしかれる 五 9

(雨宿り煙管を出して叱「ら」れる)

雨宿りをしている人が、煙草を吸おうと煙管を出して叱られている様子。江戸市中では街頭での喫煙は禁止である。

五番目を吸付て出て叱られる 六八 13

38 ○ 袖の下度_レかさなりてほころびる

(袖の下度重なりて綻びる)

綻びるⅡ①衣服などの縫いめの糸がはち切れる。②隠

していた気持や事柄が隠しきれずに外に出る。(目)
袖の下(ワイロ)も度重なると露見するということを、
「袖」の縁語で「綻びる」としたところが手柄の句。
席上では、「伊勢の海阿漕が浦に引く網も度重なれば
現れにけり」(謡曲『阿漕』)を踏まえるとの意見あり。

39 ○ もの思ひ久しい掛^ツを思ひ出し 拾九31

(物思い久しい掛けを思い出し)

ぼんやりと物思いをしていると、ふと、長い間払って
貰えないままになっていた古い売り掛けを思い出したり
する。

席上では、掛け取りに出かけたついでに、他の古い掛
けを思い出したとの意見あり。

一二^チ首ハじせいも出来る物おもひ 露丸明三忠2

40 ▲ いそかしい見世につき袖ていしゆ也 五9

(忙しい店に突き袖亭主なり)

突袖¹袂の中に手を入れて袂の先を前方へ突き出すこ
と。気取ったり落着いたさまで歩く時などにする。(江)
奉公人たちが忙しく働いている店先で、突き袖で悠然
としているのはこの家の亭主である。

つき袖て涼んで居^ルか地主なり 明三満2

